様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５３１０２５

研究課題名（和文）地域教材開発力のある教員の養成方略の創造－ＥＳＤ授業開発を通して－

研究課題名（英文）A study on the strategy to train the Undergraduate students aiming to be teachers who can develop local teaching materials of local area learning

研究代表者
伊藤　裕康（ITO, Hiroyasu）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２７９０７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：最近の研究では，多くの小学校教員は地域教材を開発する能力の欠如により社会科を教える際に困難を感じることを明らかにする。教師教育における同問題の解決として香川大学と愛知教育大学の大学院生がESD用社会副読本の開発を試みた。大学院生による社会科副読本を作成する方法は、教材開発をする訓練であり、自分たちで教材開発能力を獲得する方法である。本副読本作成経験では①異なる大学の大学院生同士が協同することで教員に求められるチームとしての対応力，②教材開発のための資料収集・聞き取りを通じたコミュニケーション力，③それぞれの専門的内容を実際の授業や児童・生徒を想定して構成する授業構成力の経験を積むことができた。

研究成果の概要（英文）：Recent studies in Japan have demonstrated that the trouble in teaching social studies for many primary school teachers resulted from the lack of competence in developing teaching material of local area learning by themselves. To solve this problem in teacher education, we tried to develop a social supplementary reader for ESD by both graduate students of Kagawa University and of Aichi University of Education. The Method of making a social studies supplementary reader by graduate students in teacher education is a convenient means of training and acquiring competence in developing teaching material of local area learning by themselves. The experience of cooperative development of the reader brought them to advance in professional knowledge and skills for social studies, communication skills, and negotiating skills with regional authority, companies, and people to collect the data for the reader.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：地域教材開発力　社会科副読本　ESD 授業開発　教員養成　社会科教員としての資質能力

１，研究開始当初の背景

総合的な学習の時間創設以降，教員には地域教材開発力が求められた。地域学習を行う社会科が，教材開発の中核を担うと期待されたが，地域学習は，教員養成での野外調査実習の不十分さから指導の困難性があった。それ故，小学校中学年で子どもの社会科嫌悪傾向が高まると言われる。効果的な地域学習の実現に不可欠な教員の野外調査能力の充実が，地理教育と関わって説かれてきたが，地域事象を把握する技術（技能）の育成に重点があり，技術（技能）を活かしたカリキュラム開発に焦点化していない。地域調査能力の育成だけでは地域事象の把握でしかない。教材研究は，「何を」・「どのような素材によって」・「いかに」教えるかを研究することであり，教材開発と言う以上は３三要素全てのものに一貫した論理と説得力をもったデータを必要である（竹下 1993)。地域調査能力の育成だけでは地域事象の把握でしかなく，教材研究での「どのような素材によって」だけに焦点化している。しかも，それさえ養成段階ではうまく機能していない。

そこで，研究代表者は，社会科や総合的な学習の時間で活用でき，持続可能な社会を考える上でも重要な「水」を基軸にした大学院生による副読本づくりを2006年度から試みてきた。それは，地域教育のリーダーとして嘱望される大学院生が子どもの目線でフィールドワークをし，調査結果を子どもに分かる文章や図にまとめ，編集を進める中で各種資料の著作権許諾等も行い，単なる野外調査実習にない経験を積む実験であった。附属学校等での作成した副読本を活用した授業による検証から，同試みが地域教材開発力のある教員養成に有効であることも確認した。だが，副読本作成は多大な労力を要し，他の教員養成機関で行いうるシステム化も図られていない。

２，研究の目的

(1) 異なる大学の大学院生同士が協同して大学院生による水と食の問題を基軸にしたＥＳＤ用地域開発を行う。

(2) ＥＳＤ用地域副読本づくりを通じて，水食の問題を基軸にしたＥＳＤの授業開発を行うとともに，開発した副読本を活用したＥＳＤ授業開発を行う。

(3) 異なる大学の大学院生同士が協同してＥＳＤ用地域副読本開発経験によって如何なる力がつくのか明らかにする。

３，研究の方法

(1) ＥＳＤに関わる先行研究・授業実践を収集・分析し，ＥＳＤ授業開発の知見を得る。

(2) 香川大学教育学研究科の大学院生が授業プランを作成し，研究協力校で授業実践を行い，地域教材の効果を検証する。

(3) 研究代表者と研究分担者の指導のもと，香川大学教育学研究科の大学院生と愛知教育大学教育学研究科の大学院生が，効果が見込まれる地域教材を組み込んだＥＳＤ用地域副読本を開発する。

(4) 異なる大学の大学院生同士が協同してＥＳＤ用地域副読本開発過程を省察し，大学院生に如何なる力量が形成されたのか明らかにする。

４，研究成果

(１) 2010年度

① ＥＳＤ授業開発では，A， 環境，社会・文化，経済の３視点から，B， 当事者の立場に立ち，C，合意を図る授業づくりが有効であるという授業開発の知見を得た。

② 顕著なＥＳＤの素材がある地域の副読本を収集し(豊富な湧水の熊本, 水俣病ともやい直しの水俣，釜山と交流のある福岡，観光都市別府，文化財や歴史的建造物のある中津，宇佐航空隊の遺産がある宇佐，広域合併で政令指定都市となった静岡，ベットタウン四街道)，分析した結果，学習指導要領と関わらないＥＳＤの素材は採用されない傾向があることが分った。

③　2006年度より試みてきた副読本開発活動を省察し,「カリキュラムや授業をナラティブとして創り出す」という地域教材やカリキュラムの開発手法の知見を得た。

（２）2011年度

①　社会科副読本（ＥＳＤ用地域副読本)開発経験をもつ教職者の省察をし，副読本開発経験が地域教材開発力の形成に資すること,教員養成方略としての副読本開発の有効性を明らかにした。

②　小学校社会科用副読本の作成・利用状況の結果を日本地理教育学会等で発表した。作成側は「学習活動の展開の参考にする」よう求めるが，地域観察を十分にさせられないために副読本を読んで話し合う利用側の国語科的社会科の問題が明らかとなった。広域合併との関わりでは，作成側が子どもに新市町村への愛着や一体感をもたせることを編集方針とし，利用側もこの点を広域合併に関わる最大の問題とするが，教員自ら合併した旧他市町村へ出かけて学ぶ姿勢の無さが問題として挙げられた。

③　②の問題は，地域教材開発力の形成に関わる問題である。そこで，①の成果を踏まえ，香川大学と愛知教育大学の大学院生による協同しての社会科副読本（ＥＳＤ用地域副読本『水・土・里のパイオニア』)開発を行った。

（３）2012年度

①　2011年度に開発した副読本を活用し，学部生及び大学院生による授業開発を行った。その際に，2010年度に得られた「カリキュラムや授業をナラテイブとして創り出す」という知見を活用し，筋のある授業になるよう開発に努めた。大学院生の授業は，授業分析の資料となるよう逐語記録を作成した。

②　教科教育と教科専門の架橋の視点から本研究活動の省察し，日本教科学会準備大会で発表した。大学院生によるＥＳＤ用地域副読本開発活動が教科教育と教科専門との連携によるプロジェクト学習となるうること，本活動が教員養成の高度化や教員養成の修士レベル化に少なからず寄与できる試みであることを確認できた。

③　2013年2月の社会系教科教育学会にて，３年間を総括する「授業開発力のある教員の養成方略の開発に関わる試み」の発表を行った。本試みは，地理の有用性と教員養成に求められるフィールドワークが実施できることを明らかにした。

（４）　2014 年度

①　2011 年度の副読本作成経験を省察し，以下の４点の知見を得た。

・異なる大学の大学院生同士が協同することで教員に求められるチームとしての対応力が得られる。

・教材開発のための資料収集・聞き取りを通したコミュニケーション力が得られる。

・それぞれの専門的内容を実際の授業や児童・生徒を想定して構成する授業構成力を育成する経験を積むことができる。

・「これからの教員に求められる資質能力」(中央教育審議会 2012 年 8 月答申)のうち，課題探究型の学習デザイン構築や協同の学びのデザイン等の「専門職としての高度な知識・技能」に資するとともに，協同での作成や現地調査等でコミュニケーション力やチームで対応する経験，そして地域社会の多様な組織等と連携する経験を可能にする。

②　大学院生によるＥＳＤ用地域副読本開発を踏まえ, 愛知教育大学教育学部地理学専修生 (学部生)がＥＳＤ用地域副読本(『知のパイオニアー人びとをつなげる『食』の物語ー』)を開発した。

③　４年間の研究成果を報告書にまとめた。

（５）　全体成果

①　養成段階における「探究・思考」型能力を育む場として大学院生によるＥＳＤ副読本開発を位置づけ，教科教育担当者と教科

専門担当者の大学を越えた協働により，教員養成における地域教材開発力育成を図った。平成20年度の学習指導要領答申に携わった安彦（2008）は，改訂の理念や方針の背景に「キャッチアップが終わった日本社会」があり，「既存の知識を吸収し活用する『習得・記憶』型の能力だけでなく，誰も手をつけていない新しいことを試行錯誤しながら実現していく『探究・思考』型の能力」が求められると述べる。大学院生が，ゼロから教育内容を構成して試行錯誤しつつ副読本を開発することは，大学院生の「探究・思考」型能力を育むこととなる。教員が「探究・思考」型能力を育む経験がなければ，課題となる「探究型の学習」の授業をイメージすることさえ難しい。「探究型の学習」が求められる時代の教師教育の一つの方略が示された。

② 教員養成と教育現場の協働により，食の問題を基軸にしたＥＳＤ授業を開発した。ＥＳＤの授業開発の蓄積が喫緊の課題であることを考えれば，未開拓なＥＳＤ研究に資することができた。

③ 教員養成の方法と学校現場の必要性との乖離を埋める試みとなった。従来の教員養成では，地理学という既存学問による地域調査法の導入により，社会科，総合的学習をはじめ，教育現場で必要とする地域教材開発力を育成しようしてきた。地域教材開発は，A地域事象の総合的把握と児童・生徒理解，Bそれを活かした教材・カリキュラム開発，C授業実践と改良という段階を経る。学校現場では，Aの地域事象を総合的に把握する技術，Bの地域事象からカリキュラム・教材を開発する技術に欠ける教員が多い。これは教員養成の方法と学校現場の必要性との乖離を示している。AとBを組み合わせた地域教材の開発技術の体系化研究がされてこなかった。さらに，愛知県下の市町教育委員会と三河地方の全小学校中学年担任に副読本作成･利用の各立場から教員養成段階における地域教材開発力育成の手立てに関する調査でも，使用側と作成側では重視する項目が異なり，使用側と作成側のそれぞれの思惑も違っていた。本研究は，教員養成と教育現場の協働により，教科書に準じて活用される副読本を大学院生が開発する活動から，教員養成の方法と学校現場の必要性との乖離を無くすとともに，使用側と作成側との思惑の解消も図ろうとした試みである。

④ 教員養成系大学・学部固有の野外調査方法論の提案となった。教員養成系大学・学部の野外調査は，児童・生徒に野外でどのような観察眼を育成し，観察したことに基づきそれぞれの事象をどう解釈させたらよいか等，一般大学の地理野外調査と違う教員養成の視点からの野外調査であるべきだと言われてきた。だが，どのような野外調査を教員養成系大学・学部で展開するか具体策がなかつた。本研究では，「何を」･「どのような素材によって」･「いかに」教えるかという教材開発の３要素全てに一貫した論理があり，教員養成系大学・学部固有の野外調査が展開されている。

⑤ 異なる大学の大学院生同士が協同することで教員に求められるチームとしての対応力やコミュニケーション力を培う場となっている。この二つの力は，個人としてだけでなく，チームとして教材開発のための資料収集・聞き取りを行った際にも培われている。

⑥ 教科教育担当者と教科専門担当者の協働に基づく指導下での大学院生によるＥＳＤ地域副読本開発の試みは，教科教育と教科専門を架橋する研究の萌芽となった。

５，主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10　件）

① 伊藤裕康（2014）：地理の「有用性」が分る地理学習－物語構成学習による地理学習の開発－，地理学報告，pp，29-38，査読無

② 伊藤貴啓・小野晃伸（2014）：教員養成大学における社会科教員としての資質能力の育成と社会科副読本の協同的作成－大学院生による地域教材開発力育成の試み－，教科開発学論集第 2 号，pp，129-140，査読有

③ 高田準一郎(2014)：高校地理における都市計画から見た身近な地域教材の開発－広島平和記念資料館及び平和記念公園を事例として－，岐阜聖徳学園大学紀要第 53 集　教育学部編，pp，125-140，査読無

④ 伊藤裕康・白山淳史(2013)：大学院における地理教育のための教員養成の在り方－ＥＳＤ用地域副読本の開発を通して－，地理教育研究 12 号，pp，9-16 ，査読有

⑤ 高田準一郎(2013)：段丘地形の湧水に着目した開発教材－伊那谷の地場産業を事例にして－，エリア山口 42 号，pp，38－46，査読無

⑥ 高田準一郎(2013)：高校地理における河川環境に関わる教材開発－多自然川づくりの視点を導入して－，地理教育研究 12 号，pp，26－34，査読有

⑦ 伊藤貴啓 2012)：小学校社会科における地域事象の教材化と教師の力量形成（Ｉ）－地域農業学習の授業実践分析から－，愛知教育大学研究報告 61，pp，191-200，学部内査読有

⑧ 伊藤裕康(2011)：学部教員と附属学校園教員とのＣＴ授業(Collaborated Teaching)によるＥＳＤ授業の開発(1)，香川大学教育実践総合研究第 23 号，pp，119－131，学部内査読有

⑨ 伊藤裕康(2011)：学部教員と附属学校園教員とのＣＴ授業(Collaborated Teaching)によるＥＳＤ授業の開発(2)，香川大学教育実践総合研究第 23 号，pp，133－144，学部内査読有

⑩ 中山修一・和田文雄・高田準一郎(2011)：持続発展教育(ＥＳＤ)としての地理教育，E-journal GEO2011(電子版，https://www，jstage，jst，go，jp/article/ejgeo/7/1/7_1_57/_pdf)，日本地理学会，査読有

〔学会発表〕（計　11　件）

① 伊藤裕康「社会科における教科専門と教科教育」，日本教科学学会準備大会（於，名古屋国際センター），2013 年３月

② 伊藤裕康「授業開発力のある教員の養成方略の開発に関わる試み」社会系教科教育学会第 24 回大会（於，兵庫教育大学），2013 年２月

③ 伊藤裕康「社会科教員養成における授業開発力育成の試み－大学院生による用地域副読本開発を通して－」日本社会科教育学会第 62 回全国研究大会（於，東京学芸大学），2012 年９月

④ 小野晃伸・清水康行・伊藤貴啓「教員養成課程における地域教材開発力育成の試み－大学院生による社会科副読本作成を通して－」，教科開発学研究会（於，愛知教育大学），2012年３月

⑤ 高田準一郎「地形図読解に関わる地域教材の開発－災害地名と災害景観に着目した防災教育としての授業モデルの構築に向けて－」，地理教育懇話会（地理科学学会部会）（於，広島大学附属中・高等学校），2012 年 3 月

⑥ 伊藤裕康「関わりの場で育つ社会科教員の教師力－第 59 回シンポジウムまでとその後－」日本社会科教育学会第 61 回大会課題研究（於，北海道教育大学札幌校），2011 年 10 月

⑦ 伊藤裕康・山内秀則・光田淳二・松岡洋介;・白山淳史・水口純・高橋範久「社会科

副読本(ＥＳＤ用地域副読本)作成経験者の省察からみた教員の力量形成と教員養成カリキュラムの課題」，平成 23 年度日本教育大学協会研究集会（於，サンポートホール高松），2011 年 10 月

⑧　伊藤貴啓・小野晃伸・清水康行・安藤麻奈人・遠藤由紀・包朝格吉楽「愛知県における小学校社会科副読本の作成・利用状況からみた教員の力量形成と教員養成カリキュラムの課題」，平成23年度日本教育大学協会研究集会（於，サンポートホール高松），2011年10月

⑨　伊藤裕康「大学生・大学院生のフィールドワークによるＥＳＤ地域副読本の開発」，全国地理教育学会岡山例会シンポジウム(於，岡山大学文学部)，2011 年 8 月

⑩　伊藤貴啓・小野晃伸・清水康行・安藤麻奈人・遠藤由紀・包朝格吉楽「愛知県三河地方における小学校社会科副読本の利用とその変化」，日本地理教育学会（於，秋田大学），2011 年 8 月

⑪　伊藤裕康「大学院生によるＥＳＤ用地域副読本の開発」日本教材学会第 22 回大会(於，帝京短期大学)，2010 年 10 月

〔図書〕（計　２　件）

①　伊藤貴啓（2013）：第５章　地域の構造的把握と社会科地域学習を視点に構想する小学校社会科教科学、愛知教育大学教科学研究会編『教科学を創るＩ』愛知教育大学出版会，pp，65-79

②　伊藤裕康(2012)：地理の有用性と教員養成に求められるフィールドワーク，松岡路秀・今井英文・山口幸男・横山満・中牧崇・西木敏夫・寺尾隆雄編『巡検学習・フィールドワーク学習の理論と実践』古今書院，pp，243-252

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６，研究組織
(1)研究代表者
伊藤裕康（ITO HIROYASU）
香川大学・教育部学・教授
研究者番号：70279074
(2)研究分担者
伊藤貴啓（ITO TAKAHIRO）
愛知教育大学・教育部学・教授
研究者番号： 10223158
高田準一郎（TAKATA JUNICHIRO）
岐阜聖徳学園大学・教育部学・教授
研究者番号：80454289
(3)連携研究者
なし